中村えり子さん

友達と遊んだ帰り、マミさんと、書道教室に行く約束をした。時間は、後でわたしから電話することにした。

家に帰ると、久しぶりに親せきのおじさんが来ていた。母に、

「えり子、おじさんにおみやげを持たせてあげたいの。駅前の和菓子屋さんで、おまんじゅうを買ってきてくれる？」

とたのまれた。そのとき、書道教室は四時にしようと思ってマミさんに電話をかけたが、だれも出なかった。後でまたかけ直そうと思い、電話を切って、お使いに出かけた。

お店は混んでいて、思ったより時間かるりそうだった。

「こまったなあ。マミさんに早く電話をしなくちゃいけないのに――。」

やっとお使いをすませ、やきもきしながら家に帰ると、母が、

「大田さんから電話があったわよ。書道教室に行くから、いつもの広場で二時に待っているって。急いで行きなさい。」

と、せき立てるように言った。

わたしは、大急ぎでしたくをすませ、外に飛び出した。広場

に着いたのは、二時四十分ごろだったが、マミさんのすがたは見えなかった。

「もう行ったのかな。勝手に自分の都合で、二時なんて決めて。」

わたしは、ぷりぷりして、そばに転がっていた石ころをけ飛ばした。

三時近くに書道教室に着くと、すでにマミさんは練習をしていた。すぐにあやまったが、つんと横を向いて、返事もしてもらえなかった。

「なによ。わたしの言い分も聞いてくれたっていいじゃない。」

もう二度と、マミさんといっしょに、書道教室に行くものかと思った。